

源氏物語「本文と享受」の研究（I）

——登場人物の「死の季節」——

岩 下 光 雄

I

従来の『源氏』「作中人物論」は、その「死の季節」を他の登場人物との関係のなかで、問題の中心に据えて考えることは、あまりなかったように思う。「雑誌」の「作中人物論」の特集や『論集』の類を見ても、そういう傾向を指摘することができる。それは、朱雀院のように特定することが困難である場合もあるし、光源氏のように問題のある場合もある。また、桐壺の更衣の死は夏の終りであるが、鎮魂の賦は秋のはじめであるというような問題もある。だが、登場人物のなかで、主要な人々の死が、秋の季節に多いというような漠然とした言い方で、すまされる問題ではないように思う。

人の死ぬべき日は、三百六十余日いつでも存在する。無常なること、測り知れないものがある。『古今』以下勅撰集には、「哀傷歌」の「部立」が見られる。だが、「古今」「後撰」「拾遺」「千載」「新古今」と「八代集」一部の「哀傷歌」の歴史をたどっていくと、そこには、ある示唆的な傾向を指摘することができるように思う。以下、いずれも岩波書店

『新日本古典文学大系』本による調査であるが、『新大系』本の歌番号は『新編国歌大観』（角川書店）によっている。「哀傷歌」の集別歌数と、全歌数に対する「哀傷歌」の占める百分率を示すと次のようになる。なお、『拾遺抄』には、この「部立」はなく、他の「部立」の歌となっているものがある。以下「補遺歌」「異本歌」「墨滅歌」などは除く。

古今集・卷十六	829	862	34首	3.1%
後撰集・卷二十	1386	1425	40首	2.8%
拾遺集・卷二十	1274	1351	78首	5.0%
千載集・卷九	545	605	61首	4.7%
新古今集・卷八	757	856	100首	5.0%

『新古今』を頂点に見れば左高山形状のグラフを形成している。次に、これ等の歌を、詞書きや歌意などによって「死の季節」が明かであるもの、明かでないものに分類して示すと、次のようになる。A群が明かであるもの、B群が明かでないものである。B群は、詞書きや歌に季節が表現されていないもの、いてもそれによって「死の季節」をいつと特定できないものである。B群の後者には歌番号の左上に○印をつけた。また、「挽歌的哀傷歌」でないものには*印をつけた。A群は、その季節を（ ）内に示した。歌番号の左上に▲印をつけたものは歌のことはによって、×印をつけたものは詞書きによって、△印をつけたものは歌のことはと詞書きとによって、それぞれ「死の季節」を知ることができる歌であることを示す。

古今集

A群

△832 (春) · △839 (秋) · △840 (冬·服喪) · △842 (秋·服喪) · △845 (夏·服喪) · △848 (秋) · △849 (夏) · △850 (春)

△859 (秋) · 9首

B群

829 · 830 · 831 · 833 · 834 · 835 · 836 · 837 · 838 · 841 · 843 · 844 · 846 · 847 · 851 · 852 · 853 · 854 · 855 · 856 · 857 · 858 · 860 · 861

後撰集

A群

△1401 (秋) · △1406 (春) · △1407 (春) · △1409 (秋) · △1410 (秋) · 5首

B群

1386 · 1387 · 1388 · 1389 · 1390 · 1391 · 1392 · 1393 · 1394 · 1395 · 1396 · 1397 · 1398 · 1399 · 1400 · 1402 · 1403 · 1404 · 1405 · 1408 · 1411 · 1412 · 1413 · 1414

拾遺集

A群

△1279 (春) · △1280 (夏) · △1284 (夏) · △1285 (秋) · △1288 (秋) · △1311 (秋) · 6首

B群

1274 · 1275 · 1276 · 1277 · 1278 · 1281 · 1282 · 1283 · 1286 · 1287 · 1289 · 1290 · 1291 · 1292 · 1293 · 1294 · 1295 · 1296 · 1297 · 1298 · 1299 · 1300 · 1301

千載集

1347 . . . 1302
 . . . 1327 1303
 1348 . . . 1304
 . . . 1328 1305
 1349 . . . 1306
 . . . 1329 1307
 1350 . . . 1308
 . . . 1330 1309
 1351 . . . 1310
 . . . 1331 1311
 72首。 (*印をつけたもの28頁)
 . . . 1332 1312
 . . . 1333 1313
 . . . 1334 1314
 . . . 1335 1315
 . . . 1336 1316
 1337 . . . 1317
 . . . 1338 1318
 1339 . . . 1319
 . . . 1340 1320
 . . . 1341 1321
 . . . 1342 1322
 . . . 1343 1323
 . . . 1344 1324
 . . . 1345 1325
 1346 . . . 1326

A群

△548 (夏) . . . △549 (夏) . . . △555 (夏) . . . △556 (夏) . . . △557 (夏) . . . △561 (夏) . . . △569 (秋・服喪) . . . △572 (夏) . . . △573 (夏)
 ・△582 (夏) . . . △586 (夏) . . . △587 (夏) . . . △588 (夏) . . . △603 (秋) . . . 14首。

B群

○545 . . . ○546 . . . ○547 . . . ○550 . . . ○551 . . . ○552 . . . ○553 . . . ○554 . . . ○558 . . . ○559 . . . ○560 . . . ○562 . . . ○563 . . . ○564 . . . ○565 . . . ○566 . . . ○567 . . . ○568 . . . ○570 . . . ○571 . . . ○574 . . . ○575 . . . ○576 . . .
 ○577 . . . ○578 . . . ○579 . . . ○580 . . . ○581 . . . ○583 . . . ○584 . . . ○585 . . . ○589 . . . ○590 . . . ○591 . . . ○592 . . . ○593 . . . ○594 . . . ○595 . . . ○596 . . . ○597 . . . ○598 . . . ○599 . . . ○600 . . . ○601 . . . ○602 . . . ○604 . . . ○605 . . . 47首。

新古今集

A群

△759 (春) . . . △760 (春) . . . △761 (春) . . . △762 (春) . . . △763 (春) . . . △764 (夏) . . . △765 (春) . . . △766 (春) . . . △767 (春) . . . △768 (夏) . . . △769 (夏) . . . △770 (夏) . . . △771 (夏) . . . △772 (夏) . . . △777 (秋) . . . △778 (秋) . . . △779 (秋) . . . △780 (秋) . . . △781 (秋) . . . △782 (秋) . . . △784 (秋) . . . △785 (秋) . . . △786 (秋) . . . △788 (秋) . . . △789 (秋) . . . △790 (春) . . . △791 (春) . . . △792 (秋) . . . △795 (秋) . . . △797 (秋) . . . △798 (秋) . . . △799 (秋) . . . △800 (秋) . . . △801 (冬) . . . △802 (冬) . . . △803 (冬) . . . △804 (秋) . . . △822 (春) . . . ×828 (秋) . . . ×829 (秋) . . . △844 (夏) . . . △855 (夏) . . . 42首。 (*印をつけたもの1首)

B群

818・819・820・821・822・823・824・825・826・827・830・831・832・833・834・835・836・837・838・839・840・841・842・843・845
 ・757・758・773・774・775・776・783・787・793・794・796・805・806・807・808・809・810・811・812・813・814・815・816・817
 ○846・○847・848・849・850・851・852・853・854・856・58首。(*印をつけたもの11首)

以上の結果を集計すると、次のようになる。

新古今集	千載集	拾遺集	後撰集	古今集	A群
42	14	6	5	9	B群
58	47	72	35	25	計
100	61	78	40	34	哀傷歌全体のなかで A群の占める百分率
42.0 (46.1)	23.0 (21.1)	7.7 (12.0)	12.5 (12.8)	26.5 (28.6)	

百分率の下段に()で示した数値は、各群から「挽歌的哀傷歌」でないものを除外し、修正を加えた百分率である。次に季節の明かなA群のうち、「死の季節」が四季のどの季節に属するのか、さらにそれが、A群全体のなかでどのよ
うな百分率を占めているのか、を示すと次のようになる。

新古今集	千載集	拾遺集	後撰集	古今集	春		夏		秋		冬	
					歌数	百分率	歌数	百分率	歌数	百分率	歌数	百分率
11		1	2	2								
26.2		16.7	40.0	22.2								
8	12	2		2								
19.1	85.7	33.3		22.2								
20	2	3	3	4								
47.6	14.3	50.0	60.0	44.4								
3				1								
7.1				11.1								

これらの事実を論拠にして、次のように要約し、展望することができる。

(1)・「死の季節」が、四季のすべてに亘っている歌集は『古今』と『新古今』の二つの勅撰集だけである。この二集は、「秋の季節」の歌が最も多く、それぞれ44.4%、47.6%に達している。次に多いのが「春の季節」で、それぞれ26.2%であるが、「夏の季節」も多い。それぞれ22.2%、19.1%となっている。「後撰」「拾遺」も「秋」が多く、それぞれ60%、50%となっている。「後撰」は、「春」と「秋」の歌だけである。ところが、「拾遺」は、「夏」が33.3%と第二位であり、『千載』は、「春」の歌はなく、「夏」の歌が85.7%に達している。「秋」の歌は14.3%に過ぎず、その他の「季節」の歌は全く見られない。「死の季節」の歌をめぐる顕著な片寄りは、人の死が偶然そういう傾きをもっていたという論点だけでは処理できない、美意識に深く関わる問題が存在していたのではないだろうか。「後拾遺」「金葉」「詞花」の三集は「哀傷歌」の「部立」はない。

(2)・『八代集』における四季の「部立」の歌数とそれが全歌数に占める百分率を集計すると、次のようになる。『後拾遺』と、参考資料の『拾遺抄』は、角川書店『新編国歌大観』本によった。

拾遺抄	新古今集	千載集	詞花集	金葉集	後拾遺集	拾遺集	後撰集	古今集	全歌数
579	1978	1288	415	665	1218	1351	1425	1100	
54	174	135	50	93	164	78	146	134	春
9.3	8.8	10.5	12.1	14.0	13.5	5.8	10.3	12.2	
32	110	90	31	62	70	58	71	34	夏
5.5	5.7	7.0	7.5	9.3	5.7	4.2	5.0	3.1	
47	226	161	58	101	142	78	226	145	秋
8.1	13.4	12.5	14.0	15.2	11.7	5.8	15.9	13.2	
30	156	89	21	48	48	48	64	29	冬
5.2	7.9	6.9	5.1	7.2	3.9	3.6	4.5	2.6	
416	1271	813	255	361	794	1099	919	758	その他の歌
71.8	64.3	63.1	61.5	54.3	65.2	81.3	64.5	68.9	

(参考資料)

四季の歌以外の歌群の占める百分率は、『拾遺』の81.3%、『金葉』の54.3%を除き、六勅撰ともに60%台で、選歌意識に一つのバランス感覚が存在したものと想定すべきである。「春」部の歌は、『新古今』8.8%、『拾遺』5.8%を除き、10.3%

から14.0%の間に六勅撰集がともに10%台に並列している。「秋」部の歌も『拾遺』の5.8%を除き、11.7%から15.9%の間に七勅撰集がともに10%台に並列している。これに対して、「夏」部と「冬」部との間には、歌集によって入集歌数にかりりの相違が見られる。「夏」部では『金葉』が9.3%で最も高く、『詞花』7.5%、『千載』7.0%と、この時代に山形状のグラフが頂点を形成している。『新古今』『後拾遺』がともに5.7%で、「古今」までは山形状グラフの裾野の部分形成している。「冬」部の歌は『新古今』7.9%、『金葉』7.2%、『千載』6.9%、『詞花』5.1%で、『金葉』を境に百分率が高くなっていく。「古今」から『後拾遺』までの四歌集を成立順に百分率で示すと、それぞれ、2.6%、4.5%、3.6%、3.9%である。ここでも『拾遺』『金葉』の存在が大きくクローズアップされる。参考資料として付した『拾遺抄』も、また、「八代集」のそのような傾向に逆行するものは見られない。

(3)・B群の総歌数、「挽歌的哀傷歌」でないものとして*印をつけた歌数、「死の季節」はいつと特定できないが季節が表現されているものとして○印をつけた歌数を、それぞれ、A欄、B欄、C欄に集計する。さらに、「A」から「B」を減じた歌数をD欄に、「C」が「D」に占める百分率をE欄に示すと、次のようになる。

		古今集	後撰集	拾遺集	千載集
A	25	35	72	47	
B	5	1	28	2	
C	4	7	13	9	
D	20	34	44	45	
E	20.0	20.1	29.6	20.0	

新古今集	58	11	7	47	14.9
------	----	----	---	----	------

季節への意識、「季節感」の表現という点では、「拾遺」「新古今」がやはり他の勅撰集と比較して問題意識があるように見える。

A群の歌とC欄の歌とを集計し、それが哀傷歌の総数に占める百分率を示すと、次のようになる。百分率の下段に()で示した数値は、「挽歌的哀傷歌」でないものを除外し、修正を加えた百分率である。

新古今集	千載集	拾遺集	後撰集	古今集	A群C欄の計	総数	百分率
49	23	19	12	13	100	34	49.0 (55.1)
							37.7 (39.0)
							24.4 (38.0)
							30.0 (30.8)
							38.2 (44.8)

「哀傷歌」のなかで、何らかの意味で季節への意識に関わる表現をしている歌は、「新古今」の49.0%から「拾遺」の24.4%、修正を加えた百分率では、「新古今」の55.1%から「後撰」の30.8%の間に、それらの百分率が分布している。

「死の季節」をめぐる意識には、勅撰集によってかなり大きく相違する部分と普遍的で相違しない部分とが見られる。

『古今』によって指向され、確立されていった「季節感」は、「死の季節」という世界では拡散し、薄れていったように見える。だが、『後撰』から『拾遺』へとそういう傾斜を示しながらも、『金葉』を挿んで『千載』から『新古今』へという歴史のなかで、またそうした意識の確立へと向って、大きく動いていったことがわかる。

(4)・『新古今』は、文学史的には「中世」の作品であるが、王朝文学の光芒、残照としての史的世界と意味とを負う作品でもあった。『古今』に見られるような撰者達の高い撰集意識に貫かれた歌集であることは、「哀傷歌」の部立てを通しても明確に知ることができる。巻頭に「題しらず」の詞書きで、遍昭の「末の露」と小町の「あはれなり」の歌を置く。遍昭の歌は『新古今』撰集の際、『古今』に入集していないことを撰者達が不思議がったという。赤瀬信吾氏は、岩波書店『新大系』の脚注で「哀傷歌は人の死に対する悲しみを詠んだ歌。巻頭に、無常を主題とする高僧の歌をすえる。」「七五七の遍昭と七五八の小町とは同じく六歌仙で贈答歌もある。」(225頁)と注記する。巻頭に並置された遍昭、小町の二首の歌は、「挽歌的哀傷歌」ではない。しかし、続く七五九番歌から七七二番歌までの十四首は、すべてA群の歌である。さらに、七七七番歌から八〇四番歌までは、五首の歌を除く二十三首がA群の歌である。かなり精選度の高い撰集意識が見られる歌集であるが、挿入したり、補入したりしていて、整然としていない部分も混在している。非「挽歌的哀傷歌」八五四番歌は、藤原季繩の公忠朝臣に宛てた辞世の歌で、『大和』一〇一段の物語と重複、「無常の世の痛恨の嘆き」(『新大系』257頁 脚注)を詠んでいる。八三一番歌から八三五番歌の五首も「無常の心を」の詞書きのもとに西行の「いつ歎き」の歌、慈円の「みな人の」「きのふ見し」「よもぎふに」「われもいつぞ」の歌を集めている。六歌仙時代の「無常」の歌に対応する「無常の心」を当代意識のなかに据え直していると読み解いていいのではないか。そこには、対偶する撰集意識が顕著に見られるようである。ところが、最後に残った非「挽歌的哀傷歌」の八五〇番歌と八五一番歌、この詞書きは「題しらず」で、小町の「あるはなき」と業平の「白玉か」の二首の歌が並置されている。

卷八「哀傷歌」巻頭の遍昭と小町の「題しらず」の詞書きと全く同じで、歌の主題もともに六歌仙であることも対偶する。「白玉か」の歌は、『隱岐本新古今集』で切り出された歌であるが、『伊勢』六段「芥川」の物語の歌。「消なまし物を」は、天福本では、「消えなましものを」、「新古今」と同じ本文をもつのは『伊勢』大島本・塗籠本などである。巻八は、延喜御歌、兼輔、季繩、具平親王、紫式部歌へと続いて、八五六番で終っている。この対偶的に並置された二組みの歌のもつ意味は、考え直さなければならぬ問題を持っているように思う。ともかく、こういうかなり精度の高い撰集意識と挿入的、後置の部分をも混在させながら構成され、「死の季節」の意識が明確に確立していった姿をそこに見ることが出来る。それは、『新古今』の美意識として、王朝的なるものの集成、残照であるとともに、中世的なるものへの展望、発展への意識を秘めていた。

以上指摘してきた種々相と深く関わる問題を『源氏』の登場人物の「死の季節」に据え直して再検討を加えることは、興味深いことのように思う。『石山寺縁起』には、琵琶湖に映る秋の名月に、いたく感動した紫式部が、「源氏の間」に籠って、須磨、明石の巻から物語を執筆したと伝えられている。それは一つの伝承文学、唱導文学との深い関わりを示している。そして、ものさとし、自然の攝理に対する畏敬の念とある柔らぎの心ともいべきものを示してもいる。

II

『源氏』の登場人物のなかで、主要な人々の「死の季節」が、どのように表現されているのか、検討を加えることにする。岩波『大系』本による。

(1) 藤壺の死

○春のはじめより、悩み渡らせ給ひて、三月には、いと重くならせ給ひぬれば、(薄雲 227頁) ○ともし火など

の消え入るようにて、はて給ひぬれば、(薄雲 230頁)

(2)六条御息所の死

冷泉帝二月二十余日即位。○七日八日ありて、うせ給ひにけり。(薄標 127頁) ○雪、霰かき乱れ荒るる日降りみだれひまなき空になき人のあまかけるらむ宿ぞ悲しき(薄標 128頁)

(3)左大臣の死

○年もかへりぬ。(薄雲 223頁) ○その頃、太政大臣亡せ給ひぬ。(薄雲 226頁)

(4)大宮の死

春三月二十日死去 ○三月廿日、おほ殿、大宮の御忌日にて、(藤裏葉 184頁)

(5)柏木の死

○泡の消え入るやうにて、亡せ給ひぬ。(柏木 35頁)

以上(1)〜(5)の人々は、春の季節に死んでいった人達である。

(6)桐壺の更衣の死

○その年の夏、御息所、はかなき心ちに患ひて、(桐壺 30頁) ○「夜なか、うち過ぐる程になむ、絶えはて給ひぬる」(桐壺 32頁) ○野分だちて、にはかに肌寒き夕暮の程、つねよりも、おぼし出づること多くて(桐壺 34頁)

更衣の死は夏の終りで、その鎮魂の賦は「野分」の季節の訪れのなかに語られていく。

(7)葵の上の死

鳥辺野には八月廿日余日の有明。 ○殿の内、人ずくなに、しめやかなる程に、にはかに、例の御胸をせきあげて、

いたう惑ひ給ふ。(葵 333頁)

(8)紫の上の死

○まことに、消えゆく露の心地して、限りに見え給へば、(御法 182頁) ○(八月)十四日に亡せ給ひて、(御法 186頁)

(9)夕顔の死

八月十六日、宵過ぎる頃。○引き動かし給へど、なよくとして、我にもあらぬさまなれば、(夕顔 149頁) ○十七日の月さし出でて、河原の程、御さきの火も、ほのかなるに、鳥部野のかた見やりたる程など、(夕顔 159頁)

(10)宇治の八宮の死

八月二十日の夜、八宮他界。○おほかたの空の気色も、いとどしき頃、君だちは、朝夕霧の晴るる間もなくおぼし嘆きつゝながめ給ふ。(椎本 353頁)

以上(7)~(10)の人々は、秋の季節に死んでいった人達であるが、死んだ日や野辺送りの日などが、「八月何日」というように、明確に示されている。ところが、他の季節の死者と相違する点である。ただし、弘徽殿の太后は直接その死が書かれていない。若菜卷下に「九月は院の太后のかくれ給ひにし月なれば、」と朱雀院五十の御賀にからんで記述されているに過ぎない。

(11)宇治の大君の死

十一月に入って重態。○見るままに、物の枯れゆくやうにて、消え果て給ひぬる。(総角 462頁)

(12)桐壺の帝の死

十月末。○おどろくしきさまにも、おはしまさで、かくれさせ給ひぬ。(賢木 377頁)

(13) 朱雀院の死

二月廿日以前、不明。○故朱雀院の、取りわきて、このあま尼の御事をば、(宿木 112頁)

宇治大君、桐壺帝は冬の季節に死去。朱雀院は二月廿日以前であるが不明。

(14) 右大臣の死

○三月十三日、神、鳴り閃めき、雨、風さわがしき夜、御かどの御夢に、院の御かど、御まへの御階のもとに渡らせ給ひて、……御つゝしみ、内裏にも宮にも、限りなうせさせ給ふ。太政大臣、亡せ給ひぬ。(明石 79頁)

右大臣の死は春の季節と考えられる。

(15) 光源氏の死

○物思ふと過ぐる月日も知らぬまに年もわが世も今日や尽きぬる

朔日のほどのこと、「常よりも殊なるべく」と、おきてさせ給ふ。親王たち、大臣の御引出物、しなぐの祿などもなど、「二なうおぼし設けて」とぞ。(幻 216頁) ○「故院の亡せ給ひて後、一三年ばかりの末に、世を背き給

ひし嵯峨の院にも、六条院にも、さしのぞく人の、心、をさめむ方なくむ侍りける。」(宿木 50頁)

光源氏の死はいずれの季節であったか明確でない。「鬚黒の死」が、源氏と前後して他界したという見方もあるが、「鬚黒の死」という観点からも決定することは困難のように思う。ただ、竹河の巻に、

○さまざまに、かしづき立てむことを、おぼしおきて、年月の過ぐるも、心もとながり給ひし程に、あへなく亡せ給ひにしかば、夢のやうにて、「いつしか」と、急ぎおぼしし御宮仕へも、おこたりぬ。(竹河 251頁)

とあり、「冷泉院に、御子のやうにおぼしかしづく四位の侍従、その頃、十四五ばかりにて」(竹河 254頁)、「この四位の侍従の御有様」(同)などと見えている。匂宮の巻では、「秋、薫、右近中将、四位」である。従来から官位、年立な

どに問題を残して来たところであるが、物語は、

○む月の朔日ごろ、かむの君の御はらからの大納言、高砂うたひしよ、藤中納言、故大殿の太郎、真木柱の一つ腹など、まゐり給へり」(竹河 255頁)

と続く。「む月の朔日」は翌年のことであるから、鬚黒の死は、冬の季節とも臆測することもできる。春になってはじめて「故大殿」と表現されていることが注意される。それ以前は、「亡せ給ひにしかば」(竹河 251頁)「殿おはせで後」(同 252頁)となっている。そして、こういう表現に注意して読んでいくと、朱雀院の死も、「二月廿日以前、不明」ではあるが、「故朱雀院の」(宿木 112頁)とあるところから、最も近い季節である冬の季節であったと臆測することができるのかも知れぬ。光源氏の死の季節も明確ではない。ただ、出家は「死」とその「転生」を意味するという「読み」方からすると、幻の巻の「物思ふと過ぐる月日も知らぬまに年もわが世も今日や尽きぬる」の巻末歌はどのように解釈すべきであろうか。諸注が注記するように、この歌は「後撰」冬・藤原敦忠の「もの思ふと過ぐる月日も知らぬ間に今年は今日にはてぬとか聞く」の上の句をそのまま用いている。「大成」によると、河内本では「わか世も」が「我身も」、河内本と同じ異文を持つのは別本系の御物本と陽明文庫本である。「つきぬる」が、別本系の麥生本、阿里莫本では「はてぬる」となっていて、「後撰」敦忠の歌に近い語句を持つテキストが存在する。小学館『全集』の頭注に「年が明けたら出家しようと考えているので、わが人生は、この年の暮れとともに終わったというのである。」(536頁)とあり、源氏の物語はここで終わる。源氏は年明けて間もなく出家し、嵯峨の御寺に籠ったとは後の宿木巻に語るところである。「年もわが世も」尽きたと述懐する源氏は、再びその姿を現わすことはない。幻巻は、あたかも月次の屏風絵の画面に季節が流れるように、ひと年の経過を歌によって語りつづつてきたが、紫の上に先立たれた悲傷はその過程でだいに昇華し、そのままなだらかに出家への道を開いていくことになった。(幻 536頁)

と注記している。岩波『大系』、「その出家も死もついに物語のなかで描かれることなく、後の巻で回顧されるにすぎない」(七 222頁)とする小学館『完訳 日本の古典 20』、新潮『古典集成』などの注記にも、本質的な差違は認め難いように思う。しかし、阿部秋生氏は、「自他共に許していた世俗の栄華にもかかわらず、わが生涯は憂愁悲哀に満ちたままならぬ生涯であった、といわざるをえないという述懐が、若菜下・御法・幻に、殆ど同一の論の運び方で繰返されている」(『光源氏論 発心と出家』1989年8月10日 東京大学出版会 186頁)と指摘され、そうした述懐が、藤壺、紫上の述懐と同様の趣旨を語っていると解釈される。そしてそれは、師輔の子高光少将、道長の子右馬頭頭信のように、将来の栄達を見棄てて、墨染めの衣に身をやつす権門の公達の生き方と深く関わるもので、「そういう人々の心の底を解釈してみると、「あないみじ」「あはれ」というだけでは覆いきれない、外貌からは見てとれない意識の底の憂愁があって、それがこの物語の作者にも伝わって来たということではないだろうか。」(同 220頁)と臆測されている。そしてさらに、「紫の上が白玉楼中の人となってしまった時、六条院には悔恨と哀慕の思いが遺る。」(同 280頁)とされ、

六条院にとつては、紫の上がいなくなつてからの日々は、何の意味もない。取り返しつかない痛恨と追憶だけが残しながら空転しているのである。その一年余の後に、ただ年が明けたら出家しよう、ということだけをきめているのである。そこに、どれだけの思慮があるわけでもない。何の整理もされていないその時々々の想念を、限らない悲しみと共に抱きこんで、ただ出家しようとするのである。年が明けたら、ということにどれほどの理由があるわけでもないが、「今年をばかくて忍びしつれば」と思うのである。かつて六条院が期していたように、心静かな出家というわけにはゆくまい。出家しても、この悔恨、哀慕の思いは消えないであろう。(同 280頁)

と指摘されている。本文の校異をも考慮された徹底的な解釈を通しての「読み」ではあるが、また、従い難い点も多い。鈴木日出男氏は、「光源氏の造型を中心に、この物語の古さと新しさから成る緊張的なくみを解きほぐすことが、す

ぐれた今日的な課題」(『国文学』平成3年5月号 110頁)であるとされる。そして、「作中人物たちの意識をはるかに超える次元で、その人物たちが索引されていく。したがって、光源氏の栄達への途と恋の人間関係を有機的に関連づけようとする作品固有の論理が、はじめから作用していた」(同 108頁)と指摘される。高橋享氏が「源氏物語は固定視点から表現されているのではなく、「作中人物たちはもちろん、多くの見聞者や伝承者、筆記編集者たちの語りの声が、ポリフォニックな物語世界を織りなしており、多義的な意味を生成している。」(『源氏物語作中人物論集—付、源氏物語作中人物論・主要論文目録—』森一郎編著 勉誠社 平成五年一月五日 1頁)と指摘されているのも、阿部氏の立論と深く関わるものであり、「今日的な課題」が何であるかを示唆しているように思う。だが、桐壺帝の「死の季節」が冬であり、朱雀院も冬であると読んでくると、幻の巻巻末の和歌の意味はもっと別の作意が秘められていたのではないか。この歌が「後撰」藤原敦忠の歌の上の句をそのまま用いたものであることは諸注の注記するところであるが、それが「冬」の季節の歌であり、光源氏の死を予測する「辞世」の歌でもあり、雲隱の巻に続いていく意味をも考えていくと、光源氏の「死の季節」も、また冬の季節を象徴するものとする読み方が存在していたと推測することができるのではないだろうか。嵯峨野での出家の物語とは別に、そういう読まれ方が、物語享受の方法として存在していたことを探ることは、この物語に新しい別の光を照射していくことにはしれないか。「冬籠り 春さり来れば」という『万葉』のことは、魂籠り充甞するために真床覆衾に籠って、天皇霊を鎮魂した古代の信仰を基層に、民俗信仰として拡散していく姿を、その底に秘めているように思う。それは、春の季節に若返る「王権」の「魂籠る」季節を意味していたと考えることもできる。宇治の大君の死が冬の季節であったことは、その人物像に深く関わるものではあるが、父八宮の死が、物語に登場する女性たちとともに秋の季節であり、「王権」の座から遠ざけられなければならないことも、深く関わるものであったように見える。大君が、宇治十帖の物語のなかで果たす重い役割、薫の愛の形代の原像という

愛の根源に関わる深さ、という論点から、父の「死の季節」との関係のなかで、やはり据え直し、再検討を加える必要がある。

『源氏』第二部は、若菜上の巻から幻の巻に至る源氏の年立では四十歳から五十二歳までのほぼ十二年間の物語である。桐壺の巻も、やはりその誕生から元服までの十二年間の物語である。この年立の対応は偶然の一致であったとは考え難い。物語の作者は、注意深く年立を追っていたのである。その誕生と元服の物語を六条院の秩序の崩壊、紫の上の死、源氏の出家とその死を暗示するという物語に対偶させ、対応させて語っている。そういう物語構成の意識を注意深く読みとっていく必要があるはしないか。そればかりか、桐壺の巻は確かに行事中心の年立では十二歳までの物語ではあるが、読み方によっては、その後の物語をも揺曳している。従来は宣長の「手枕」の巻の存在というようなものを無意識のうちに据え過ぎて読んでできてしまったのではないか。そして、幻の巻の巻末も、そういう余情、余韻を残す手法で終っている。やはり巻末の物語とじめの手法のなかに、対偶、対応、照応のあとが明確に読みとられるのである。登場人物の「死の季節」を表にまとめて一覧にすると次のようになる。

藤壺 六条御息所	桐壺更衣	葵上 紫上	桐壺帝
左大臣		夕顔	朱雀院 ・光源氏
大宮		弘徽殿太后	宇治大君
柏木		宇治八宮	
右大臣			
春	夏	秋	冬

*問題のあるもの

春の季節に死んでいった人々のうち、左大臣、大宮、柏木は、ともに左大臣家という家系に属する人々である、という論点から見えていくこともできる。対立する右大臣家も、ともに執念く家に憑く怨霊にたたられる家がらである。しかし、やはり、「死の季節」という意識を、その奥に揺曳しているようにも見える。藤壺も六条御息所も、ともに死後、怨霊となってあらわれ、源氏をさとすという点では共通する。源氏を「めざまし」「つらし」と思う心情が、一方の根底に存在しているように思う。「冬籠り 春さり来る」季節は、自然が芽吹き、生命の躍動する季節であるとともに、人間の営みがかかないもの、憂愁に閉ざされたものであることを知る季節でもあった。つまり、自然のみずみずしさ、悠久さに対して一方では、魂の結びほれる季節感を伴っていた。両大臣家の人々の死のなかには、そういう憂愁が、深く関わっていたように見える。そのように、登場人物の人物像と深く関わり合いながら、家系や季節感、美意識に関わっている人物の「死の季節」の意味を読みとっていく必要がある。

秋の季節に死んでいった葵の上と紫の上とは、六条御息所の怨霊が深く関わっていたという点で共通する。女三宮の出家も、やはり六条御息所の怨霊が関わりとする。夕顔の死にも、六条御息所の怨霊が関わりとする見方もあるが、既にくり返し抽論のなかで述べてきたように、直接的にその関与を認めることはできない。光源氏の「心の鬼」を主軸に、『紫式部集』の歌や『今昔』の説話などを重ねて造形されていた物語であり、さらに漢籍の世界をも引きき込んでいることが指摘されている。多彩に構成されたロマンであった。そして、それは、八の宮邸にとどまり住んでいた若い男の修業僧の怨霊が、浮舟を出家させたという物語と対比、対応する物語であったことを考えるべきである。それについても別に指摘したごとくである。八の宮が政権の座から遠ざけられ、零落のなかに出家し、死んでいったことも、その生涯と人物像に深く関わるものであり、令泉王朝成立の根底を政治的に支えて生きてきた藤壺の死と、また対立する意図が存在するもののように思われる。秋の季節に死んでいった人達が、死んだ日や野辺送りの日などを、「八月何日」と

いうように、具体的に、明確に示している相違は、やはり他の季節とは違った別の意識が働いていたからに違いない。秋の季節は旧暦七、八、九月である。『物語』中に、それらの季節が表示されているものを、吉沢義則『新釈』本(平凡社)索引によって示すと次のごとくである。尾州家河内本との校異を()で示した。

○七月 (七例)

紫 203・賀 306・須 34・明 92・幻 340・竹 416・椎 53・

○八月 (十四例)

顔 136・末 244・葵 352・滲 126・蓬 151・少 351・野 101・菜下 103・霧 213・椎 61・寄 226・238・東 4・手 262・

○九月 (二十例)

顔 155・葵 342・賢 384・関 178・槿 269・少 355・玉 394・袴 172・172・菜下 103・霧 254・258・幻 341・椎 64・総 107・145・寄 290・東 70・70・手 270

○七月

(1)七月になりてぞ参り給ひける。珍らしうあはれにて、(ナシ)いとどしき御思ひの程限りなし。(若紫)△藤壺懐妊、参内▽

(2)七月にぞ后居給ふめりし。源氏の君、宰相になり給ひぬ。(給へり)(紅葉賀)△藤壺立后▽

(3)七月になりて参り給ふ。(うける)いみじかりし御思ひの名残りなれば、(須磨)△朧月夜、朱雀帝に参内▽

(4)七月廿余(ナシ)日の程に、又かさねて京へ帰り給ふべき宣旨くだる。(明石)△源氏京へ召還▽

(5)七月七日も、例に变りたること多く、御遊びなどもし給はで、つれづれに眺めくらし給ひて、(幻)△源氏、亡き紫の上を思う▽

(6) 七月より孕み給ひにけり。うち悩み給へるさま、(竹河) △玉髪の姫君、冷泉院の御子を懐妊▽

(7) 七月ばかりになりけり。都にはまだ入り立たぬ秋の気色を、音羽の山近く、風の音もいと冷やかに、槇の山辺も僅かに色づきて、なほ尋ね来たるに、をかしう珍らしう覚ゆるを、(椎本) △薫、宇治の八宮を訪れる▽

○八月

(1) 八月十五夜、隈なき月影、隙おほかる板屋、(夕顔) △夕顔の宿、その死▽

(2) 八月廿よ日(日頃)、宵過ぐるまで待たるる月の(いと) 心もとなきに、星の光ばかりさやけく(かに) (末摘花) △末摘花邸▽

(3) 八月廿日余日(廿余日)のありあけ(あさぼらけ)なれば、空の気色も、あはれすくならぬに、(葵) △葵の上の野辺送り▽

(4) 権中納言の御むすめ、その年の八月に参らせ(奉り)給ふ。(落標) △昔の頭中将の姫君、冷泉帝に参内▽

(5) 八月野分あらかりし年、廊ども倒れ臥し、下の屋ども(ナシ)のはかなき板葺なりしなどは、骨のみわづかに残りて、立ちどまるげすだになし。煙絶えて(ナシ)あはれにいみじき事多かり。(蓬生) △末摘花邸▽

(6) 八月には(ぞ)六条の(ナシ)院造り果てて渡り給ふ。(少女) △六条院完成▽

(7) 八月には故前坊の御忌月なれば、心もとなくお(も)ぼしつ明け暮るるに、この花の色まさる気色どもを御覽するに、野分例の年よりもおどろくしく、空の色変りて吹き出づ。(野分) △秋好中宮の父君の忌月。六条院▽

(8) 山の御門の御賀も延びて秋とありしを、八月は大将の御忌月にて、(若菜下) △葵の上の忌月。朱雀院五十の賀▽

(9) 八月の十日ばかりなれば、野辺の気色もをかしき頃なるに、山里の有様のいとゆかしければ、(夕霧) △夕霧、御息所の見舞などにごつづけて小野の里に赴く▽

(10) 八月二十日の程なりけり。大方の空の気色もいとどしき頃、君だちは、朝夕霧の晴るるまもなく、思し歎きつつながめ給ふ。有明の月のいと花やかにさし出でて、水のおもてさやかに澄みたるを、(椎本) 八宮の死

(11) 左の大い(右大臣) 殿には急ぎ立ちて、八月ばかりにと聞え給ひて(ナシ) けり。二条の院の対の御方に(ナシ) は、聞き給ふに(宿木) 八夕霧、匂宮と六君との結婚を。宇治の中君それを聞く

(12) 八月になりぬれば、その日など外よりぞ伝え聞き給ふ。(宿木) 八宇治の中君、匂と六君との結婚を

(13) 八月ばかりと契りて、調度をまうけ、はかなき遊び物をせさせても、(東屋) 八浮舟と小將との結婚を

(14) ほのかに見しさまは忘れず、物思ふらむ筋何事と知らねど、あはれなれば、八月十(よ) 日あまり(ナシ) の程に小鷹狩のついでにおはしたり。(手習) 八中將、小野の里に浮舟を訪ねる

○九月

(1) 九月二十(廿余) 日の程にぞおこたり果て給ひて、いといたう(く) 面瘦せ給へ(ひた) れど、(夕顔) 八源氏の病全快

(2) 九月には、やがて野宮に移ろひ給ふべければ、(葵) 八六条御息所が

(3) 九月七(八) 日ばかり(ほど) なれば、むげに今日明日とおぼすに、(賢木) 八六条御息所、伊勢下向のこと

(4) 九月晦日なれば、紅葉のいろくこきませ、霜枯の草むらくをかしう(く) 見えわたる(関屋) 八関屋(山) での出会い

(5) 長月になりて桃園の宮にわたり給ひぬるを聞き(給ひ) て、(槿) 八源氏が槿姫君の事を

(6) 九月になれば、紅葉むらく色づきて、宮のお前えもいはずおもしろし。(少女) 八六条院の秋好中宮のお庭

(7) かくいふは九月のことなりけり。渡り給はむこと、すがしく(し) もいかでかはあらむ。(玉鬘が六条院に)

(8) 九月にもなりぬ。初霜結ほほれ、えんなる朝に、例のとりくくなる御後見どもの、引きそばみつつもて参る御文どもを、(藤袴) △玉鬘への懸想文を▽

(9) 数ならば厭ひもせまし長月の命をかくる程ぞはかなき(藤袴) △鬚黒の文▽

(10) 九月は院の太后のかくれ給ひにし月なれば、(若菜下) △弘徽殿太后の死▽

(11) 明け暮るるもおぼし分かねど、月頃経ければ、九月になりぬ。(夕霧) △一条御息所の死を嘆く▽

(12) 九月十日(の)野山の気色は、深く見知らぬ人だに、ただにやは覚ゆる。(夕霧) △夕霧、落葉宮を訊ねる▽

(13) 九月になりて、九日、綿おほひたる菊を御覧じて、(幻) △源氏、紫の上への思い▽

(14) 明けぬ夜の心地ながら九月にもなりぬ。野山の気色、まして袖の時雨を催しがちに(椎本) △八宮「きあとの邸

(15) かの人は、つつみ聞え給ひし藤の衣も改め給へらむ長月も静心なくて、又おはしたり。(総角) △薰、大君を訪ねる▽

(16) 九月十(よ)日の程なれば、野山の気色も思ひやらるるに、時雨めきてかきくらし、空の村雲怖ろしげなる夕暮、

(総角) △薰、匂宮を伴い中君を訪ねる▽

(17) いとど昔遠くなる心地して、すずろに心細ければ、長月廿よ日の程におはしたり。(宿木) △薰、宇治を訪ねる▽

(18) 「九月にもありけるを、心憂のわざや。いかにしつる事ぞ。」(東屋) △薰が浮舟と会うのを、侍女が▽

(19) 「九月は明日こそ節分と聞きしか」といひ慰む。(東屋) △(18)と同じ場面▽

(20) 九月になりて、この尼君初瀬にまうづ。(手習) △妹尼が浮舟を得たよろこびを▽

七月の資料(1)、(6)と、(2)、(3)とは、それぞれ関連する事項で対偶的に表現されている。(4)も司召に準じ関連すると見ると、(2)、(3)なども関連するように見える。七月に秋の情趣があまり語られないのは、資料(7)の季節感と深く関わって

るように思われる。宮廷の公的行事と関わるような記述が多い。

八月は、七月の資料(7)にからんで季節感の表現が深められていく。余情、詠嘆的な表現、和歌的詞句を取り込んだ詩情豊かな抒情的表現が目につく。人の死も、そういう季節の表現と深く関わって語られている。また、「死の季節」であるとともに、入内、結婚の季節でもあった。資料(4)、(11)、(12)、(13)はそのことを示している。「八月某日」という表現で、「死の季節」とは無関係であるのは、(2)、(9)、(14)の三例に過ぎない。その他はすべて「八月野分あらかりし年」というように表現されている。行事や事項の記述はそれでよいが、日時の具体的、明確な叙述は、やはり季節感をはっきりとさせ、臨場感を生々しく語っていくのに効果的な表現である。それは、九月についても同じである。資料(1)、(3)、(13)などには直接的にそういう心情の表現は見られないが、(4)、(12)、(16)、(17)などには、やはりそうした表現意識がはたらいっている。そして、(1)、(3)、(13)などにも、行事や事項を明確にしていくという表現効果が見られる。それは、さらに(6)、(8)、(14)などの「九月になりて」というような表現にも、明確に読みとることができる意識である。「源氏」には、そうした表現意識が鮮明である。したたかに鋭く迫る語句が散りばめられ象嵌されているのである。

秋の季節は、「衰え」を感じ、「人を思索に導く季節」だと中西進氏(『日本人のこころ』大修館書店 1992・10)は指摘されている。「飽き」はまた、紅葉の道を踏み分けて死者を探し尋ねていく季節であり、死者を復活するために、常世の国から聖なる靈魂を運び来ること、遊離魂を招き鎮魂することを呪術としてなし得る季節でもあった。そういう長い固有の伝承や民俗信仰を基層にもつ季節でもあった。

松田武夫氏(『平安鎌倉私家集』岩波 日本古典文学大系80 昭39・9)は、『好忠集』の解説で次のように述べられている。

歌材の取りあげ方が斬新で、不羈奔放な語句を自由に駆使し、万葉調の復活を目ざす一方、古今集的修辭技巧をも

捨てず、多様性に富む自在な詠法によるのが特色である。こうした異色ある歌風を示したので、古今集の歌風の継承と温存とをむねとした当時の歌人たちからは、むしろ異端視されたが、和歌史の上から見れば、後拾遺・金葉両集に端緒を發した和歌革新の先駆的歌手としての榮譽を勝ち得たものとされる。(7頁)

また、藤岡忠美氏(『日本古典文学大辞典』岩波書店)は、その「作風」について、

好忠の「鳴けや鳴け蓬が柚のきりぎりす過ぎゆく秋はげにぞ悲しき」△後拾遺集・秋上▽という歌の「蓬が柚」が異例の用法であることから、藤原長能は「狂惑の奴なり」と好忠を非難したという△袋草子▽。たしかに好忠の和歌には、発想の上では『古今集』以来の固定した類型を承けながら、用語や語法は和歌伝統からはみ出た新奇なものが多くつかわれ、反貴族的な田園のことばや耳なれない草木の名、『万葉集』以後絶えていた語などを織りまぜることで、土俗や生活のにおい、愛欲などを主題とする歌が数多くみられる。それらは彼の不遇な生活と意識にあくまでも執した訴嘆の調べに結びつきやすいものであり、その時最も好忠歌の独自性を發揮した。そうした新風は後に源俊賴などに受けつがれてゆくものであった。(第四卷 57頁)

と指摘されている。曾禰好忠を「反古今的歌手」とする文学史の見方は、著しく減殺されてきたように思う。『好忠集』の「毎月集三百六十首」は、不遇を歎き訴えるもので、好忠歌の粹を集めている。それに続く「百首歌」には、確かにそういう意識の後退も見られる。「三百六十首歌」「百首歌」は、当時多かった詠歌形態ではあるが、不遇を嘆く「百首歌」の詠法は、藤原定家の「百首歌」の世界にも続いていく。『後拾遺』『金葉』に端を發する和歌革新の方向は、『詞花』『千載』『新古今』へと続く八代集の世界のなかで、どのように方向づけられていったのか、それらについては別に稿を改めて論じなければならぬが、『千載』の哀傷歌に夏の歌が多く片寄っていることは、やはり、『拾遺』あたりからはじまる「女房歌」、新しい王朝和歌の転換を承けるものではなかっただろうか。桐壺の更衣の夏の季節の死は、

零落する亡びの家の系譜とそこに生きる更衣一門の心意気、人物像と深く関わりながら、そうした和歌史の動向をも読みぬいていた紫式部のしたたかな史眼、季節感にささえられていたように思われてならない。『好忠集』の夏の歌にも、注意すべき歌が見られる。